

がん体験者における不安の内容の経時的変化に関するレトロスペクティブ研究

庄木 晴美

<問題と目的>

がんを体験した人々にとって、不安は主要な問題である（「がんの社会学」に関する合同研究班，2004）。しかし、従来の研究では不安状態と不安の内容（心配）は明確に区別されておらず、また、時間経過に伴いがんに関する心配がどのように変化するかについて明らかにされていない。そこで本研究では、回顧的手法を用いて、3時点（診断時・初めて治療を受けた直後・現在）でのがんに関する心配の経時的変化について検討した。また、不安に関連する心理的要因として、不合理な信念の影響を統制して検討した。

<各研究における結果と考察>

研究1：がん体験者における心配の経時的変化に関する検討

がん体験者の心配の経時的変化について一般傾向を把握することを目的として、がん患者用心配評価尺度（平井他，2006）とJapanese Irrational Belief Test-20（森他，1994）を用いて、がんに関する心配と不合理な信念を測定した。その結果、現在では、過去2時点よりもがんに関する心配の得点が有意に低いことが示された。この結果は、心配と有意な相関が認められた不合理な信念の依存と無力感を統制しても同様であることが確認された。さらに、現在、もっとも心配の程度が高い項目および低い項目は、Hirai et al. (in submission) の乳がん患者の特徴と一致していた。

研究2：ストーマを保有する大腸がん体験者における心配の経時的変化に関する検討

大腸がんは罹患率が上昇しているが、予後が良好で、長期生存が期待できるがんの1つである。しかし、大腸がんの中でも直腸がんは、人工肛門（ストーマ）の造設によってQOLが損なわれやすい。そのため、大腸がんでストーマを造設した者

の不安に関する知見を蓄積する目的で、がんに関する心配の経時的変化をがん以外の疾患でストーマを保有する者と比較した。なお、研究1と同様の調査材料を用いた。その結果、大腸がんの有無にかかわらず、全体的な心配の程度は過去2時点よりも有意に低いことが明らかにされたが、心配の内容別にみると、3時点で得点に有意差が認められない心配の内容も存在した。また、ストーマ保有者の心配の経時的変化には不合理な信念が関連することが示された。

<総合考察>

本研究の結果から、がんに関する心配の程度は時間経過に伴い有意に減少することが明らかにされた。また、現在でも相対的に心配の程度が高い内容の特徴が明らかにされたことは、がん体験者の不安をより具体的に理解する上で有用であると考えられる。

ストーマ保有者においては、大腸がん罹患の有無によってがんに関する心配に違いは認められず、不合理な信念が心配の経時的変化に関連していることが示されたことから、不合理な信念はストーマ保有者の心配を理解する上でも有用であることが示唆される。

<引用文献>

Hirai, K., Shiozaki, M., Motooka, H., Arai, H., Koyama, A., Inui, H., & Uchitomi, Y., (in submission). *Discrimination between Worry and Anxiety among Cancer Patients: Development of a Brief Cancer-related Worry Inventory*. Manuscript submitted for publication.